



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.141  
2015.6.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

43

## 「中央道用地内遺跡調査で私も調査員も興奮した遺跡幾つか」

私は阿智村5遺跡・飯田市20遺跡・高森町9遺跡・飯島町7遺跡計36遺跡を担当し、もう一つの班の遺跡も幾つか指導した。遺跡の面積の大小や内容の濃淡があったが、私にとっては其々に思いは残っている。発掘は地下に埋もれている未知の生活残存との出会いである。その出会いに私はどう対面したのか、語りかけてくる相手にどう答え、どれだけ相手を理解したかと思うと十分ではなかったと後悔の気持ちが強い。

ともあれ未知の遺構・遺物に出会って私も調査員・補助員が興奮・驚喜した遺跡が幾つもある。その出会いから皆が真剣になって勉強した。幾つかを紹介する。

45年9月 飯田市権現堂前遺跡で弥生後期の方形周溝墓を検出した。縦15m横12mの縦長の南中央に陸橋のある大きな墓で、当時は全国的にも珍しく、長野県でも数少ないときでした。私の蔵書を調査員が合宿する部屋の一つに置き開放した。皆は『神村文庫』といって活用していた。遮那藤麻呂君が中心になって関係文献目録と内容紹介で学習した。その後幾つもの遺跡で方形周溝墓を検出しこの勉強が生きた。石子原遺跡では主体部に木炭やガラス小玉が、滝沢井尻遺跡では主体部から鉄剣が二振り出土し、杉原荘介先生に知らせると弥生時代に鉄剣が有るはずが無いと言われた。

46年4月 飯島町鳴尾天白遺跡 5・6月と尾越遺跡と縄文中期後半の集落を調査した。鳴尾天白遺跡では10軒・尾越遺跡では28軒の住居址と多量の土器・石器の遺物を得た。これも当時としては集落としての検出は珍しく注目された。調査報告会を兼ねて学習会を計画し県外の研究者にも呼びかけた。8月飯田市下伊那教育会会館で団長大沢和夫先生・主任今村善興先生と私・調査員小林正春、根津清志、矢口忠良、酒井幸則、山岡栄子、遮那藤麻呂、福沢幸一、木下平八郎が分担して資料集を作成し発表した。二日目は参加者と中期後半の土器・集落の構造・埋甕・土偶・石器

群・土製円板・その他のテーマで意見交換した。県外から増子康真・戸田哲也・猪越公子・向坂鋼二・渡辺誠・荒木ヨシ・水野正好、県内では藤森栄一・宮坂光昭・田中清文・桐原健等が発言・質問があって私達は種々教えられ、次への学習意欲が湧いた。

47年6月14日 飯田市石子原遺跡から黒土層下の赤土から石英・チャートの剥片が集中して出土するのを、遮那君が確認して本部にいた私の所に連絡があり私は飛んでいった。これこそ話題になっている前期旧石器ではと思い芹沢長介さんに電話する。18日仙台から駆けつけてくれた。17日の調査速報には皆が神村文庫で文献をあさり勉強したとある。芹沢さんから前期旧石器で十分な調査が必要との助言で、早速県教委に連絡しマスコミにも連絡する。全県・全国的な話題となり公団とも協議し再契約し2次調査をすることになる。8月東北大岡村道雄君が主任となって調査する。戸沢充則・林茂樹・森嶋稔・小林達雄・田村晃一・川上元等県内外からの見学者が殺到した。見学者の話を聞くことで知見を増し、自分たちがこの遺跡に関わったというささやかな自負もあった。6月の調査団の興奮は忘れられない。報告書を見ると芹沢さんの新聞で紹介した文のコピーと葉書・手紙と原稿が挟んである。私の宝物の一つである。

47年8月からの高森町増野新切遺跡は縄文中期後半の大集落で住居址78軒と多量の遺物は、先の縄文中期学習会の課題への取り組みのいい機会であった。私も調査員も一つ一つの住居址と出土遺物に強い関心を持って当った。報告書では検討したことは書けなかった。最初の一文を発表したのは調査員であった八木光則君でした。私も幾つも勉強し書かせてもらっている。

個人的には阿智村坊塚の中世信仰壇・鼎町山岸遺跡の弥生後期から古墳時代にかけての集落・高森町瑠璃寺前遺跡の中期終末の土器に石棒を直立させた住居内祭壇・同町増野川子石遺跡の草創期の表裏縄文土器などがある。この調査で得た資料で私は幾つも書いてきており、最大の宝物の蓄積となった。

47年度で飯田地区の調査は終り学校現場に帰ることになった。このとき道路公団からご苦労さんと志野焼の大きな花瓶を貰った。座敷の床の間に時々花を飾っている。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。



▲瑠璃寺前遺跡 伊沢教育長視察



▲増野新切遺跡

## 目次

■田舎考古学人回想誌 中央道用地内遺跡調査で私も調査員も興奮した遺跡幾つか 神村 透 …1  
■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第6回) 岡田淳子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第134回) 高橋 学 …3  
■考古学者の書棚 「縄文土器をつくる」 町田賢一 …4

## 考古学の履歴書

## 過ぎし日の軌跡 一女として考古学研究者として(第6回)

岡田 淳子

## ⑥山内清男先生の下で

山内先生の下で過ごした3年間は、まるでトラップされたような日々であった。先生は毎朝、同時刻の電車に乗り、同時刻のバスで大学に着く。その時、私が白衣に着替え仕事の出来る態勢になっていなければいけない。

山内先生から命じられた仕事は、四つ切りの印画紙を先生発案の通り、同形5等分のキャビネ形に切り、それに縄文土器片の写真を焼き付けて収納すること。ジャニター室の奥にある暗室で、授業の合間に連日、何百枚も焼き付けた。ある程度溜まった頃、先生が水洗した写真を回収し、廊下で自然乾燥させる。先生の研究の基礎になった東北地方の大木遺跡から始まって、北から西までその夥しい数の焼付けは、以前に学んだ知識に加えて「縄文土器型式」を私の頭にも焼付けた。少し前、大量の写真フィルムをデジタル化しながら、山内先生がなさっていたのは、一時代前のこの作業だったと思った。

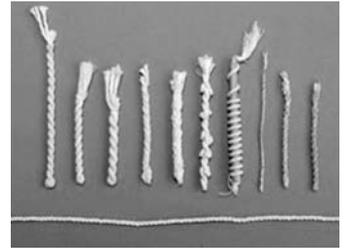
17時を過ぎると、先生は「腰の周りに風船がたくさんついたようにふわふわして来るのですよ」と言われ、神田の古書店行きに誘われる。斎藤忠先生と競うように、目ざとく戦前戦中の珍しい考古学書や古地図を見つけては買い求められるのだ。連日の古書店歩きにはいささか疲れたが、私はお蔭で雑誌「ドルメン」やアジアの「民族と文化」シリーズなどを手に入れて、過去の業績を学ぶことができた。

山内先生の研究は良く知られている通り、縄文文様の原体と、その転がし方の発見である。縄そのものや棒に巻きつけて転がす文様の99%は、山内先生によって解明されたと言ってよい。それでも常に先生はテーブルの上に数片の土器片を置いて「これはまだ解明できていないのです」と言われていた。文化変化は日本中で時期に大きなずれをもたらすに進んだ、という先生の主張は頷けたし、土器の文様帯の移動も、なるほど納得できた。先生は後にそれらの総集編ともいべき、まとめを発表されている(講談社刊『日本原始美術 縄文土器』1964)。

先生はまた、持ち運べる小さな拡大鏡(ルーペ)の利用は別として、考古学の研究では「目で見えるもの」「数えられるもの」以外は信用できないとも言われていた。西暦20世紀半ばに放射性炭素年代測定のような物理学的、また化学的方法が新しく開発され利用されていることに、抵抗するものだったのかも知れない。もう一つ先生は、話をメモすることを禁じられ「黒手帳の人間にはなるな」と言われた。考古学研究者には必要なことなのだろうか。お陰で頭の中に記憶しておくことが容易になったとは思ふ。

山内先生の下で参加した縄文の発掘調査には千葉の「幸田貝塚」と、茨城の「浮島貝塚」があった。幸田貝塚は縄文文様が最も変化に富んだ前期前半、関山式土器を主体とする貝塚で、山内先生はその年(1956年)、先史人類学実習にこの遺跡を選び、文化人類学専攻の学生たちがそこで発掘の方法を学んだ。山内先生は、かつてご自分が掘られたときには狭い範囲の「坪掘り」で「他人に邪魔されず、研究には、あれ

が一番良い」と言われていた。時代と人柄を良く表している。最近幸田貝塚について書かれたものを目にしたが、曾野寿彦氏の参加が記されていた。曾野先生は当時、文化人類学研究室の助手をされていたのでその任



▲久保田正寿氏(立正大学特任教授)作製の縄文原体、右の3つの素材は藤の根の繊維

にあっただが、一年おきに泉靖一先生のペルー・プロジェクトと、江上波夫先生のオリエント・プロジェクトで重要な役目を果たされていて超多忙。その上、直前に沖永良部の調査にも行かれ、腰を落ち着ける暇がなかった。そこで私が一部お手伝いすることになったのだが、最近、当時学生として参加した一人が、思い出として講演の中で語っていた。私が、昼に肉体労働をして、夜は毎晩遅くまで図の整理をしていたことを。それは発掘調査ではごく当たり前の日課である。10mlほどのトレンチを1本掘っただけだったが、壁面に状態の良い純貝層が出ていた。山内先生は、調査終了間際にそこで「狸掘り」を始められ、掘り進めた壁の部分がいきなり崩れて、貝殻の中に埋まった。近くにいた私も弾き飛ばされ助けられたが、先生はその時、誰もご自分を助けてくれなかったと、恨み節を述べられていた。

浮島貝塚は前期後半の時期で、一転して縄文は無く貝殻文全盛の土器をもつ。斜面貝塚なので大きな巻貝の殻が、ごろごろと下まで転がっていった。山内先生は、そこで始めて発見された特殊な貝殻文の施文法を究明しようと、研究室前の廊下の整理台で口も利かずに没頭されていた。気が散るから人を近寄せないようにと命じられた私は、たまに廊下の曲がり角まで行って様子を確認めた。

一週間くらい経って、やがてそれが解明された時の先生の明るい嬉しそうな顔が忘れられない。二枚貝の縁を2か所残して欠き取り、ロッキングさせて三角の連続沈文をつけたことを確認されたのだ。その文様を私は「三角切り取り文」と、ただ現象から記述していたことを恥ずかしく思った。とうてい山内先生の弟子とは言えそうもない。山内先生の研究は「実験考古学」を基礎とするものであり、縄文文様を究明された時のように、今回も徹底的に実験を重ねられていたのであった。

## 略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウィスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年~現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

## Uレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 134

## 弘田柵跡 ～秋田県大仙市・美郷町～

高橋 学

1931年、秋田県で最初の国指定史跡となったのが弘田柵跡である。9世紀初頭、古代出羽国に創建された弘田柵は、多賀城や秋田城と並ぶ城柵としての規模と威容を誇るが、当時のような名称で呼ばれていたのか明らかではない謎の巨大遺跡でもある。

弘田柵跡は、“あきたこまち”米の主産地である仙北平野の沖積低地とここに浮島状に二つ並ぶ長森・真山の小丘陵を選地する。弘田は所在地の字名に、柵跡の名は明治時代に発見された際、多くの柵木が発見されたことに由来する。

弘田柵跡の発掘調査は、1930年に文部省による第1次調査、1974年からは秋田県が現地に弘田柵跡調査事務所を構えて毎年、学術調査を継続している。1974年の第2次調査以降、昨年(2014年)で第148次調査に至っている。その成果は次のとおりにとまとめられる。



▲弘田柵跡全景

柵跡は二丘陵を大きく囲む外柵と、長森を囲む外郭、長森丘陵中央部の政庁からなる。外柵は一辺30～35cm角柱状に加工した杉(いわば秋田杉)による柵木堀で構成され、それは二つの丘陵を取り囲むよう

に東西1,370m、南北780mの長楕円形状をなす。柵木は沖積地面に隙間なく立て並べられ、使用された総数は12,000本に達する。柵木一本あたりの長さは、抜き取られ木道に転用された材が発見され、地上高3.6mであったことが判明した。年輪年代測定により、複数の杉材が西暦801年に伐採されたことが判明し、創建年代が同年頃と絞り込むことが可能となった。柵木堀には東西南北の四方に八脚門が付く。ただし、外柵・各門とも建替が認められず、創建1時期のみであったことが明らかとなり、遅くとも9世紀中頃には長森を囲む外郭が最も外側の区画施設となる。

正門である外柵南門を潜ると幅員10m程の大路が北に延びる。途中で河川と交差するため設置された木橋を渡り、長森丘陵裾まで達すると外郭南門に至る。外柵で囲まれた広大な沖積地は当初、耕地が広がり馬が放たれ、兵士等が居住する空間と推測していた。ところが実際には複数の川が流れ、河川敷・湿地が広がる所であり、居住には適さない場の多いことが明らかになってきた。

外郭南門は、弧状をなす石垣(石罫)に接続する特徴をもち、これは東北の古代城柵では唯一例である。石罫を構成する石は、二丘陵が第三紀硬質泥岩からなる残丘であることに始発し、まさに足下にある石材を切り出して利用している。

長森丘陵裾部を巡る外郭は、石罫のある南側では基底幅3m程の築地堀であり、北側の沖積地では外柵と同じ柵木堀

を採用する。外郭南門を登った先に政庁域が存在する。政庁内の建物は、他城柵と同様に正殿、両脇殿が広場を介してコ字形に配置される。正殿は5時期の変遷が認められ、最終段階の正殿柱堀方出土の土師器小皿から、その終末時期が10世紀後半と推測された。政庁域を区画する堀は、通例的には築地堀であるが、弘田柵は柵木堀となる。木材を多用した城柵と言える。東西に長い長森丘陵は、政庁の東側に実務官衙域が広がり、一方の西側は鉄を中心とする鍛冶関連の工房域であることが明らかとなってきた。

私は、調査事務所三代目の担当として、1999年から11年間弘田柵跡の発掘に携わることができた。その中でも最も印象に残るのが、初年の第115次調査である。調査区は政庁域の西側丘陵部で、現在は鍛冶工房域として認知されるが、当時は調査の手が全く及んでいない区域であった。先行して調査が進んでいた丘陵東側が実務官衙域であり、対する西側域の様相を探ることが本調査の目的であった。

当然、掘立柱建物跡が検出されることは想定していた中での出来事である。径1mの円形土坑のプランが見つかった。作業員さんに土坑の半分を掘り下げるよう指示したところ、作業員さん曰く「これでは、ダメだ」「段下げて、アタリ(柱痕)の有無を…」と。頭では理解していたつもりでも、ここは緊急調査ではなく学術調査、径1mを越す柱堀方がいくらかもある弘田柵跡なんだと。結果的に円形土坑は、2×4間の掘立柱建物跡を構成する柱堀方となったことは言うまでもない。



▲長森丘陵南端部で露出する硬質泥岩

本調査区では、あまり知られてはいないが縄文時代の「石器石材採掘場」も確認されている。石罫に利用された硬質泥岩は縄文期にも使用されていたのである。

丘陵頂部南端では基盤の泥岩が広く露出する状態で検出された。このなかには、基盤層に埋もれている大型の泥岩上部を人為的に打ち欠いた痕跡を残すもの、泥岩の分布が希薄な箇所では土坑状の落ち込みを確認した。ここには古代の遺物は認められず、縄文前期末(大木6式)の土器・石器が多く出土した。よって泥岩露出箇所とは、縄文前期における石器石材採掘場であった可能性が高いと判断した。

調査事務所設立以来、40年を超す発掘成果の積み上げはあるものの、未だに弘田柵跡の実像解明には至っていない。解明に向けた調査・研究には、柵跡周辺が散村・水田地帯という、いわば“古代的景観”を保持し続けていることが鍵となると考える。現地に立つことで、弘田柵跡と古代出羽国の実像に迫る試みを継続したい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは加藤朋夏さんです。

## 考古学者の書棚

## 「縄文土器をつくる」

後藤和民 著／中公新書(1980)

町田 賢一

私は現在富山県で埋蔵文化財の調査に従事している。けれども、大学では考古学ではなく、小さい頃から大好きだった日本史を専攻していた。このため、学生時代には考古学の専門的な教育を受けていなかった。それでも大学一年生から神奈川県で遺跡の発掘調査に調査補助員（アルバイト）として参加していた。現場では遺構や遺物が出るたびに調査職員の指導を受け、帰宅後は入門書や専門書を読むなど独学で考古学を勉強していた。

はじめて縄文時代の集落を調査したのは、大学卒業後の浪人生活の時だった。縄文時代というと素人目にもおもしろいと思っていたのだが、それを勉強しようと思ってもなかなかいい本がなかった。一般向けの簡便な本では物足らず、かといって土器型式論や集落論といった専門書は有史時代を勉強していた私には難しく、理解できなかった。そんなとき手にしたのが本書である。たしか、最初にそれを手にしたのは実家近くの図書館であったかと思う。そもそも縄文時代のことは不勉強で、著者の後藤和民氏を知らなかったし、“かずひと”という名前も読めなかった。しかし、ストレートなタイトルからわかるように縄文土器に対する熱い想いを込めた物語で、一気に読破し、強く感銘を受け、この仕事をしたい!と思わせてくれた本である。つまり私の考古学人生のはじまりの書と言ってもいい。

縄文土器というと美術的な造形ばかりに目が行ってしまい、当時の私も発掘調査で出土する土器を見るたびに感動していた。ところが本書では、「はじめに」から「縄文土器というものを、私は美しいと感じたことがない。また「好きか」と問われても、「嫌いではない」と答えるより仕方がないのである。」と書かれていた。縄文土器に興味をもつ人が読む本であるはずなのに、冒頭からこれである。たいへんな衝撃を受けた。けれども、そのことが本文を読み進めるうちにわかってくる。本文では、「Ⅰ 縄文土器研究の歩み」、「Ⅱ 加曽利貝塚博物館の誕生」、「Ⅲ 土器づくりの技術」、「Ⅳ 土器づくりの会」の順に叙述される。これら各章はただ単に独立した記述ではなく、縄文土器を通してつながっている様々な人生を追った物語のようであり、流れるように読み進めることができるものである。

「Ⅰ 縄文土器研究の歩み」は縄文土器をわかりやすく、しかも後藤氏の考えを踏まえながらまとめられており、縄文土器研究の概説書としてたいへん重宝した。

「Ⅱ 加曽利貝塚博物館の誕生」は文化財行政のあり方がわかりやすく記されており、Ⅰとあわせて当時、埋蔵文化財行政関係の就職を目指していた私には参考になったし、後藤氏の研究や保存に対する情熱に憧れてもいた。

「Ⅲ 土器づくりの技術」はいわば本書のメインである。ここには各地で体験されている縄文土器づくりとは異なり、材料採取から焼き上げまでの製作過程が細かく提示されている。そこには後藤氏とともに土器づくりを行った新井司郎氏の生き様も反映されており、熱心な研究というより凄まじさを感じ

た。新井氏の土器づくりにかける情熱と後藤氏の学問的裏付けという今でもあまりない“本当の”土器づくりの様子は本書の記述から目に浮かぶようである。彼らが目指した縄文土器とは、「水の漏らない土器」である。外面の文様をうまく創出することはそれほど大事ではなく、いかに水が漏れないように内面を調整するかが命題なのである。縄文土器は、縄文時代においてはどこでもだれでもつくれるモノといった感がある。ところが、粘土の採取から焼き上げに至るまで技術と経験が豊富でないとそれができないのである。この研究からは、縄文人といえども簡単に土器がつくれたのではないと言える。

「Ⅳ 土器づくりの会」は後日談のようなもので新井氏亡き後も土器づくりを継続すべく後藤氏が奔走し、現在に残る「加曽利貝塚土器づくり同好会」創立までの様子が描かれている。

本書は1980年に刊行されており、私が学生の時にはすでに絶版になっていた。このため、図書館で借りてきたのだが、その後古書で見つけ購入した。というのも1997年に富山に来てからなぜか縄文時代の遺跡を担当することが多く、その度にこの本を読み返したくなったからである。本書を読み返すことでより縄文土器の見方を確認するだけでなく、後藤氏の加曽利貝塚や縄文土器など行政や学問に対する熱い想いを感じて自分の活力とした。

私にとって後藤氏は“本の中の人”であったが、2009年3月に千葉市で行われた「シンポジウム千葉の縄文貝塚に学ぶ」に訪れた時、後藤氏の講演「加曽利貝塚はどう守られたのか」を拝聴できた。講演は板書で行われ、大学の授業を聴いているような感じであったが、言葉の端々にある熱い想いはまさに本書と同じであった。講演でも本書でも度々出てくる「考古学とは、「名もなき民衆の生活史」を明らかにすることにある」は文献をやっていた私にとって考古学を理解するたいへんわかりやすい言葉であり、感動した。ただ、ほどなくして後藤氏が亡くなり、お元気そうであった姿からは想像できず、びっくりして声が出なかった。

私は、「加曽利貝塚博物館友の会」の会員でもある。というのも、先のシンポジウム会場で財布を紛失し落胆して帰宅したところ、翌日シンポジウム主催者の友の会員が私の財布を見つけ自宅に送ってくださった。その親切心に感銘を受け、入会したのである。以来、加曽利貝塚にはこれまで何度も訪れている。本書にある後藤氏の展示も博物館で見学した。これも本書の縁なのかもしれない。

今でも仕事で行き詰まった時などにはいつも側にある本書を読み返している。これからも自分の大事な羅針盤である。

## アルカ通信 No.141

発行日	2015年6月1日
企画	角張淳一(故人)
発行所	考古学研究所(株)アルカ 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp